

# 成人病対策の現状

公衆衛生の発展によって、かつて国民の主要死因となっていた、肺炎、結核などの感染性疾患は大幅に減少した。そしてこれらにかわって、中枢神経系の血管損傷、悪性新生物、心臓の疾患（脳卒中、がん、心臓病）という成人病が多くなり、国民死因の六〇%以上を占めるようになってきている。

しかも、四十代前後からの働き盛りの人がかかりやすいということ、社会にとっても、家庭にとっても大きな損失である。かつて、伝染病予防から出発した公衆衛生が、死亡者を少なくすることから、更に一歩進んで、病気を予防し、健康を増進する段階に入ってきているといえよう。

「人生わずか五十年」という言葉がある。昭和四十二年の平均寿命は、男六十九歳、女七十四歳となり、がんで死ぬ人がいなくなれば更に八年、脳卒中、心臓疾患で死ぬ人がいなくなれば四年長生きできることになる。人間として、不老不死を願わない人はないが、年をとると全身各所に衰えが出てくるのは当たり前なのである。健康を守るためには、自分で日常生活に注意するとともに、健康診断により、異常を軽い中に発見し、早く治療を行なうことが第一だといえよう。

次に、県が現在行なっている成人病対策についてふれてみよう。

## ◇県成人病対策審議会が充足

昭和四十三年に、熊本大学医学部、熊本県医師会、公立医療機関代表、民間公

昭和年	成人病検診受診者数
34	8,129
35	5,707
36	574
37	119
38	23,623
39	26,184
40	28,132
41	28,579
42	29,090

40才以上対象人口 458,390  
受診率 6.3%

病名	人数	延計
高血圧	7,163	13,426
心臓疾患	1,914	
動脈硬化	635	
糖尿病	660	
肝臓疾患	1,075	
腎臓疾患	1,184	
その他	795	
延計	46%	

益代表の方々の協力を得て、熊本県成人病対策審議会が発足した。これにより検診体制の強化、検診の実施方法、結果の判定規準などについて、意見が出され、県の成人病対策はいま強力に推進されつつある。

## ◇循環器疾患の対策

県では、昭和三十四年に成人病対策実施綱を定めて、循環器検診をはじめた。しかし、県で直接、検診班を編成して、検診を行なう体制をとったが、県民の検診希望の把握上の問題、あるいは検診班自体の活動上の問題等が重なって、十分の成果をあげることが困難であった。老人福祉法による健康診断の関連もあり、地域の検診希望に即応できるよ

## 現地探訪

### 栄養教室の顔

キッチンリヤカーと  
栄養改善

—下益城郡中央村—

昭和四十年、中央村に栄養教室が開かれて以来四年間、この間卒業生も六十人を越すという。

この村で栄養教室が開かれるようになった直接の動機は、中央村が他の町村に比べて成人病による死亡率が高いということであった。栄養教室発足当時の昭和四十年の成人病（特に脳卒中、心臓の疾患）の死亡率を熊本県平均と中央村を比較すると、脳卒中（県平均二〇・六、中央村二八・三・五）、心臓の疾患（県平均九六・九、中央村二五三・七）——いづれも人口十萬対——といずれも、非常に高い率を示していた。

このようなことから、栄養教室で勉強する内容も、「成人病を予防する食事の工夫」「緑黄野菜の王様」にら」と「島の肉、大豆」の栽培普及が重大となっている。栄養教室のメンバーは、中央村の各部落から数人（昭和四十三年度は三十六人）出ており、この栄養教室で勉強したことを、各部落に帰って伝達講習

う、昭和三十八年から保健所で検診を実施することに改め、年をおいて受診者が増加している。昭和四十二年には二万九千九十人の検診を行ない、（別表）のような結果であった。これによると四割位の人がなんらかの異常があることが発見されている。

## ◇がん対策

わが国の国民死因の第一位を占めるがんについては、その発生原因も十分明らかではない。発生部位により、診断技術、治療方法にもわかりにくい点があるので、患者数も多く、集団検診が効率的に行なわれる胃がん及び子宮がんをとりあげて、早期発見に努めている。

## ◇胃がん対策

胃がん対策として、政府は昭和四十一年より積極的な予算を計上しているが、本県は昭和四十二年、四十三年に、胃集団検診車をそれぞれ一台購入し、民間団体として、昭和三十九年より、検診車を購入、運行している済生会と連絡をとりつつ、事業をすすめている。その実施状況は延べ五万八千七百九人（別表）のとおりです。

昭和四十二年度県実施分の受診者八千二百七十三人に対して、精密検診を要す

る人は、千二百四十七人で、約一五%であった。この要精検者について昭和四十三年十二月末までに、受診結果が判明した人は八百八十一人で、その中、疑いも含めると二十五人（二・八%）の胃がん患者が発見され、八割弱の人は、なんらかの異常があった。その後、更に追求調査を行なったところ、受診者は千人になったが、残り二百四十七人、約二割の人に受診勧奨を行なっている。

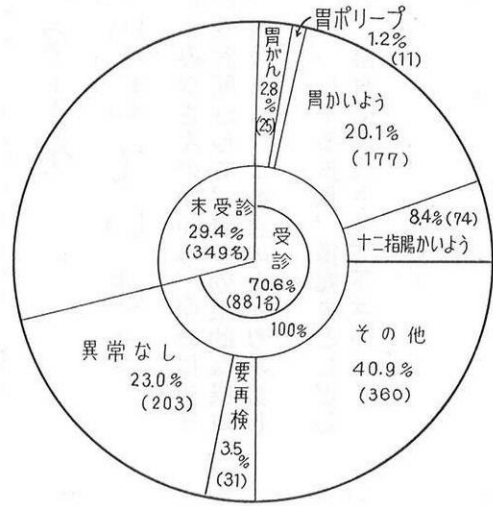
胃集団検診実施状況

	熊本県	済生会	計
昭和39年	—	654	654
40	—	2,821	2,821
41	—	13,787	13,787
42	8,273	12,470	20,743
43 (12月末現在)	10,236	14,355	20,704
計			58,709

(注) 県は年度計、済生会は年計

## ◇子宮がん対策

子宮がん対策としては、熊本県対がん協会が結成された昭和三十五年に、熊本大学医学部産



婦人科教室と菊水町立病院の協力で行なわれた集団婦人検診が始まりで、県では昭和三十八年に、産婦人科医師の協力で集団検診を始めた。婦人層の関心も高まり、（別表）のように、年々、実績は増加していった。この増加する要望を消化すべく、昭和四十二年には熊本県対がん協会が婦人検診車を購入し、保健所実施と協会実施と二本建てで実施したが、協会の人員充実が意に任せず、車の運行と細胞診を行ない、他は保健所の協力にたよっている実状であり、今後さらに効果的な検診車の運用を計画している。

一方、集団検診の細胞診の結果、精密

を行ない、全村に栄養改善を普及させようということである。

この伝達講習を行なうときに一役かっているのが、村役場に備えつけてある「キッチンリヤカー」。調理道具一式をつみ込んで、栄養改善の伝達講習の効果をあげている。

村の栄養改善に対する力の入れ方も大きく、年間十一回開催される栄養教室の材料費、燃料費などは、全額村で負担して、栄養改善で、疾病の予防を図り、村民の一人一人が健康で明るい村づくりをめざしている。

## ヒジキが品切れになる話

—上益城郡甲佐町—

「ヒジキを使った料理を実習して、その試食がたいへん好評でした。その日の夕方には、商店のヒジキが品切れになるほど、注文が殺到したそうですよ。」とは、中央学級に出席している主婦の話。

四十三年度から町が予算を計上。保健所とタイアップして、町ぐるみの体力の向上、疾病の防止を狙いとした栄養改善実践協議会を設立している。具体的には五校区からそれぞれ七人の受講生を募集。六月と十一月の農繁期を除く毎月二十日に、中央学級で講習が開かれ、ここで習ったことは、各校区に持ち帰り、一